朝夷巡嶋記 第三編 三

イ13
939
~~35~~13

門イ13
特939
巻38

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之三

東都　曲亭主人編輯

中輯第廿五

色界の孀婦鳥
欲海の和尚魚

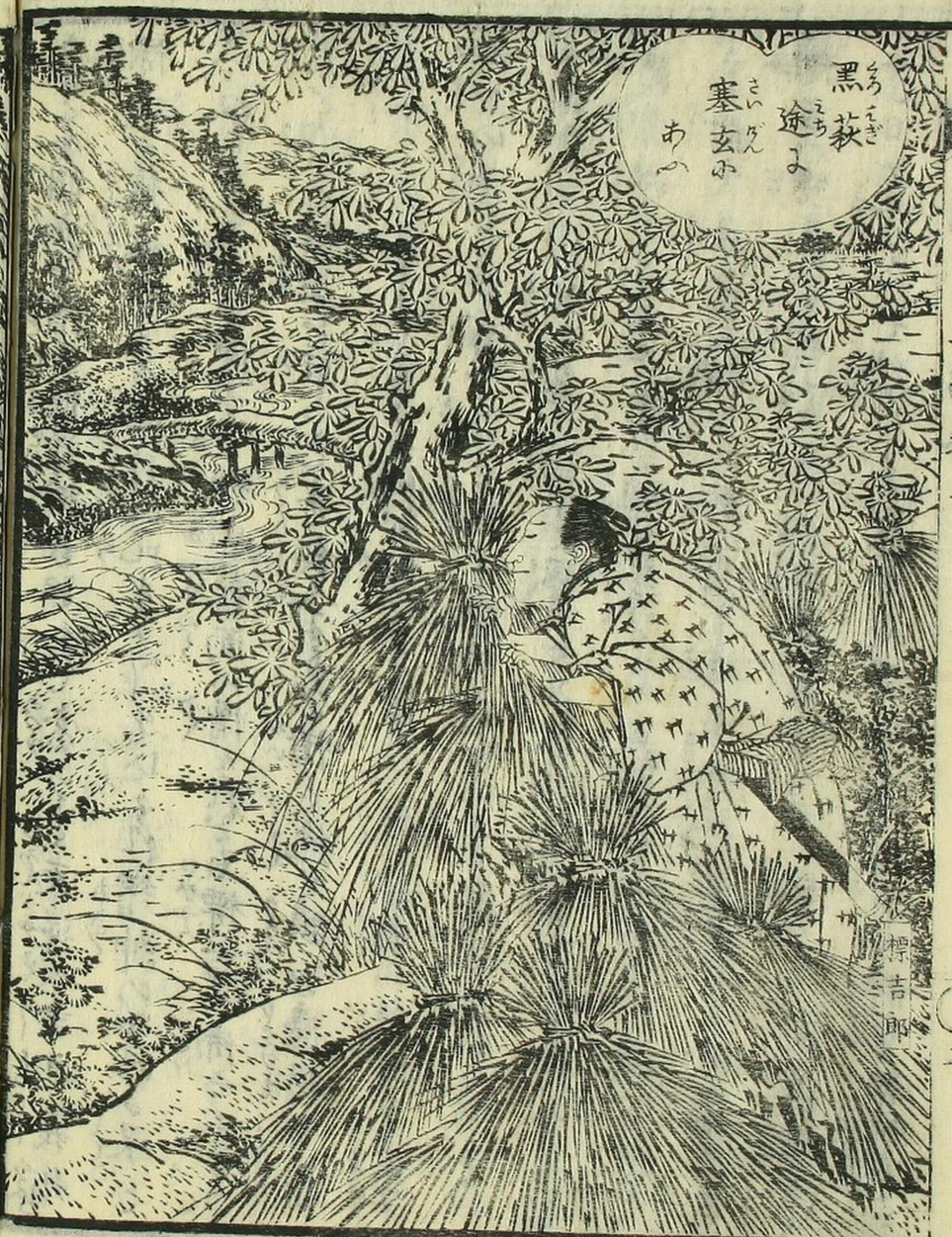
義邦いとその性温順なるが一朝の怒より乗じて黒萩を打ちと日来いわゝぬ挙動より似られども実べく心ざゝ正しく犯人非理非義なれば忍びがたき怒ありて況この君怜悧なれども歳尚二十より足らざるに千慮の一失さもあるべきなる程かは詰旦義邦が疾起く黒萩が氣色をうるよりその歎待日来より変じぬ。絶て怨るおのちはせひどなれば謀ることもあれど一点も心と放さぬ是より毎日より進止を試るよりあくまで得がたきなれば原来この老文ゞが一拳より後悔して行状を改めるる欲ありんぬ標吉も亦幸ひなん。

尻も結ばぬ紬糸の素とやもいはん女子と又釋易記も女子おこしとゆ
やくよりひとりてさのこゝに懸念せざりけり黒萩の義邦を可愛と云へ記
よりも憎しとゆへ百倍ありとゞも遥き老女のあるべきの通宵深念つゝ天明て
後は聊も怨る氣色を顕さぬ立願のすゝめありてこの日より禁酒してゆづる
身の行ひを慎むべく進止へども所為とあるゝ表裏ぞ指月寺の住持
塞玄ゞ國府より還るを候ありけりさる程よこの月廿八日八田丸郡内ゞ一周
忌ゝ當まりあれまより標吉は三日已前より山獵せぬ廿七日の逮夜ゆゑ
づゝ餅を搗く家廚ゝ供里人ゆも配遣しなどゝ盡やく秋の日は闌
りかくて錢を裹ゝ米を負ひ指月寺ゝ赴記く留守居の老僧ゝけゝ翌の
讀經を誂へ施物を布て墓ゝ詣香華をゝ向くかるさまそこの日も竟ゝ暮ゝ
けり。やる時ゆも黒萩は口ゝそゝ人ゞゞさもされ細布おゞゝ裳裙長記衣の

前後を撫るのゝ褌も せゞ。袴も せゞ。ゆゝる毎ゝ果敢とゝ絲ゞ標吉ゞ精悍記
おゞゆて共ゝ日を消せりさてその明朝黒萩は指月寺へ詣るとてまづ湯を
沸して項の脂を洗ひおゞ化粧結髪ゝ程よゝゆ午ゆゝりゝどゆゝ心ゝゞ
やるゝ飯をたゝべく衣を更やりゆく宿を煉ゝ程ゝ且くして標吉は母ゞ脱捨
舊衣を畳んとそ引揚るゝ一聯の珠数そのほとりゝ在りこれはいかゝとゝ
とりて背門ゝ出くをつゝる義邦のほとりゝゆ記く母ゞ聯て出る隨ゝ珠数を
遺れてゆひ記追ふともいゞゞ遠くはゝゝ出居ゝはゝりつけさせゆへと
いへゞ義邦点頭くそゝよくゝそゝえつけられ現老女の歩あれゞ二三町ゆは
おゞ過ゞとくゝといそゞしゆへゞ標吉慌忙記て半履をも穿ゆへぜ。
裳を裹て走去けゆかりゝ程ゝ黒萩はゆくゝと三四町ゆゝて指月寺の
塞玄ゞあゝへとて来るゝ逢ひりゝひりけゝゞ笑片向く聽て樹蔭ゝ

立會ひ昨日標吉が御寺へ參りしと云ふを聞いて帰院のすがたをながめ何の程もなく帰さるひしよりづつは富く賑し紀國府の水が深しるやうんさても若き紀ゆひよけを逗留の久しかりしは彼処の後家達を蕩しつさで面白紀るのをなりけんあるめでたしと笑ふあがら背を磯と敲著れが塞玄い半脱る歯を見しくらも笑ひ國府は富ても賑ふくも彼色界は不施不捨多縁ある紀女人は度しがたしとく立うてちん身が顔をうるおく深うひしがどそれも是も黄金佛の利益あるれば錫を振る勧化は月を累て昨夕は暮く帰著せり長途の疲労ある紀まあし程どまづうやちん身はちくせんとそ一周忌の回向がてら其方を投く赴く折ふ紀処ゆく逢ある紀といへば黒萩四下をんうり是首の府彼首の縣を待撓紀勧化は日を送らんより黄金佛の建立は捷径のすてを伯れといひうけくかは声を潜め彼骨相書をもて索らるも死延人吉見義邦標吉は奮縁ありとそ四月の比より紀繽紳のある果といいはぐりは人を使ふく檀那態面は憎れども標吉が佛ある庇を貸く母屋を取らも寄食人なるを措く絶て頭を擡得ぜ賤吾俤は恋慕して袖を引くもうるさし源氏の君の従弟でも業平朝臣の弟でもちん身を捨く仇し紀弱冠を何ぞ恋ぎ度かさなるとばうるさくは隣は罵り懲して辱しめられどその後は面も足も得出さひど寝首掻るとともやまひ過せば背が見られて夜とてやもくは睡られぜ。こぐ村は長もあく領主の館へはと遠うり訴出んも女子の甲斐なさ。標吉は甥あれども虚と大事は相譚もぜ。云へば危く形あく。ちん身が還うあふ日を待るびて待りしとひかべいてありし夜のこが僻ずを彼君よ。

塞玄
黒萩


黒萩
途よ
塞玄ゆ
あゝ
梅吉郎

あまり附くる目尻の涙を長く拭ひ乾し。塞玄丈て眼を睜りこんそも
慮外の珎事と彼義邦へ謀反の骨張紙仕ゲ与黨あるよ平泉の柵ゆへ
入らで其許の宿所よ躾れ居るゆ。ん身よ心残るべ。ん同類とも許禀
さべ則その身の罪科を免して賞祿をあるべーとあれ。よりゆ一旦舎藏も
彼双を搦く献ぶべ咎あべ処該いおれど年ようくとも撃術早技本夏ハ
いもこ揣らあこぜ毛を吹処瘢を求めべ後悔其処よ立ぐこ由断さて
潜びよう首取てゆん身よ遍与さん然とて時日ハ延さもぞ今宵ゆ。ぞハ
翌の夜よといひゲ耳を引て密語ばうち領処亡人の一周忌
七日の殺生ハ好むべきゆ。あるねども晡時ゲ過れバ精進を落ても
憚あるゆ墓奈をあとて生るよ。あより還べ疑れん彼冠者ゲ臥
房の案内今宵の暗号尚外よひ。処ゆの影あれども路辺ゆてハ

それも便ゆ。ゆん身も内寺へ共侶よ誘ゆとて香深の法衣の袖をと
引けバ引とて生ゆ小松原ゆうねの日と戯れくうち譚ひて伴ひろう。
是より先よ標吉ハ黒萩を追懸こく走ると三四町迫よ。ぞバとゲ養母ハ
道次よ立在て法師よ拠とうめ。て軈て樹下よ立會ひ額を合て
密語形勢あろゆ。ぐこ。ゆひ。ぐべ間道を遠りく後方よ近つき身長ゆも
餘る尾花ゲ袖よ躾れて一五一十を生つ吉見冠者を殺さんと相譚ゆ法師ハ
塞玄丈去歳より養母と情由あるゆ人の聚語の耳よ入きどもゆうべーとハ
ゆひ処ゆ。れ只天魔の所行ゆべ。ー管バ冠者の性こて五十よ近処人の
母よ。ゆあるとけゆゆん。や是ハ決ーくるゲ母の冠者よ調戯ゆうせーを
懲さ生ゆべ。ゆく怒こて悪心を發せ。ゆん。れ。ゆ。ぐーて彼君を害き
ゆうゆあ。ぐ月ゲ心を盡せ。甲斐ゆ。是併古主梓殿及父母の亡魂ゆ

養母よ珠数を遺れさせく吾倅を導如ゆひ〜ゐんさていうゐんとぞうゐ。
或ハ呆れ或ハ〜〜頭を傾けるを又如頻よ嗟嘆をうけるかくく標吉ハ。
困じてかへる途にぐうとうかうさゐ思惟るよ悪意ありとも養母さを頭をよ
忍びぐ〜しいぜして彼君を落さんめと。深念して其処よりいとしく宿所ハ
還るべ義邦うちとく。遅くい途ゆく追着ろゆと。向まく標吉点頭のえ。
又立戻まて諸折戸を内より楚と鎖しつく嘗の塵埃うち拂ひ義邦のほとりへ
参りく愀然として禀ぼゆう母ゆハ追着ねざもしーぐどそ〜〜びも途ゆく大変を
竊聞ゆひ如君この処よをう夢す隠をとれど人よちーれく彼此の悪棍おぐ
今宵更闌潜び入く撃まく〜んと謀るこ速よその毒氣を避ゆいぜハ危ろべし。
ゐれども日の沒るまでハゐれも稱ひいぞ某甲夜より外よ出く。先郷導仕
らん。この駒形を山踰して玉造のうさへ落さゆゑ。そのとき如某ハ尼沼川のあ
ゆて君を待まう奴歯の松の邊まで送りつけまゐん是より賀美郡よ至り山
又山ゆく里稀て案内をあくざるゆハ究ゆく迷ゆ難処ゐれども。あくゆて地理を
説とも益ゆ〜曩ゆハ母よ領ゆひし。沙金ゆもゆひが納戸の鍵ハ親あるりゆ。
腰よ著てゐれバ月今ハ不便て。それも甲夜の程よそ返し進らをべ如こと
真立く密語ハ義邦ゆ〜ち驚如原来ものうゑ〜ありけるよ。かくまぐ
命運縮まべ逃とも脱れくゐるべ〜ゐれバとて。田夫野人のよよかくらんを
無念のうゑとゆうく運を天よ任して其許の教よ隨ふべ〜又黒萩よ領け
沙金ハ月来寄宿の料ゆとゆひく実ハ渠よ与〜〜盤纏ハ腰よ餘りあるとバ
あるてくのうハ懸念ゆせを今よちであね汝が忠義落涙禁め難るゆを感謝よ
堪ぜよろこべ〜只ぐ一身一命ハ汝よ任せべきとといまて標吉額をつ如。
世が世あてをハ〜あるとバ陪臣の子の某ゆどが。ゐん目前へもゆ〜まんや。落

させぬふさ犯くまぐく後ひまるべくれども。いうゆせん。養母を捨て走らんハ不義と加藤某も知く宿所よ還らぎハ讐の追ふす速ゆ〳〵さぐれ寄寓の料をぐく宣ハ出るハ老くハ吝あるものまゝ養母ゆもあくあくろ始さーて後よ返ー事〳〵去うともこのうを今親ゆ告ぐこー去のびくよ起行の出あろうかまへ肝要ゆ〳〵と密やうよ相譚ゆ程よ秋の日ゆまゝ短くて未の刻を過こう今ハ母のうくう来ぬ〳〵氣色を曉られゆふ。あとのひつ立て諸折戸を開く外面うちなぐゆいゆぐうくと柴小屋よ掛う草鞋引おろー此彼と擇こつく石よ推當打やゝけて締を融ーぐ程よ義邦も笠の紐の断離うを結びとゆく竹縁の下よ隠し置身の西く後をふゆも又標吉ぐどハ得ぐー母ゆ秘まといひつ所ハ。黒萩謀る所ありて怨る氣色を顕さぐ飽まぐまれよ油断さぐ滑よ里人をうち相譚ひ。害せんとはろうべし。さゆを明こ地よ告げてまれを救んとゆ標吉ハ孝ゆーて且忠ありまれ足利よあー日ハ不憶并平ぐ。資よりて危窮を脱れ今又ゆよ標吉ぐ忠義よ仇を避るといへども。彼ホと始終を共よ表ぐさー皆薄命の致き所うち歎くとも甲斐やあると。ちひうへーて出べ犯くさをうくうくうくんとく立ゆへ標吉ハ打和げうう草鞋ゆ續松よ燧火縄をとり添く義邦のほとうよりて来つ君ハ暮果て後よ。厠へ登ゆうーて背門のくこよりゆ出ぬへ某ハ先〳〵ちて尼沼川のあくう俟んゆ。出後れゆふゆと諜あハせく草鞋と續松を遞与よゆん。義邦ハ遺ゆうゆ。その誠心を歓びゆえそこれをも笠とゆろ共よ竹縁の下よ置標吉ハ地坑よ柴をさー燃く夕膳の准備をもろ程よゆ黄昏よりまけり。浩処よ黒萩ハ遠ーく帰り来つ折戸を推く進を入り筧の下よ裳を褰く足の塵埃を

洗ひ流せバ後ひ来つる悪僧塞玄懐中ゆへ一口の戒刀を隠して襟巻を
ゆく面を包ミ樹牆の間より地坑のほとりに坐しゐる義邦をうかゝる程よ。
黒萩竊に指し示し更によるを抗頭を掉その意を示せバ塞玄へいく
こびとゆくうち点頭今来しうくへ退却ぬ當下黒萩ハ水田を求食鷺の
如く隻脚替に引揚て跖を拭ふ程に標吉ハ門の戸を引あけとて立出て
母ハ還りゆひしうと呼けられて黒萩ハをいと答て進み入り頃日の日の
短さ老女の歩の甲斐なくて急ぐとはまで黄昏ぬ彼君ハいかゞ。
とゝの間に義邦ハ掛燈盞に火を点し途の疲労を問慰やる氣色あるまゝ
黒萩ハ竊に歡びて他事なきを挨拶もかくて夕膳を果しゐ。
標吉ハ養母にいゆう一周忌の料供にとて里の甲乙に物を受ぐるゆゑ
いかく謝礼を述べ翌と夜ど生活に障り甲夜の程にそこうち

遠らバ支中の左側ゆハ還るべし。疲労ぬぐよく鎖して睡りゆへといみ。
黒萩ハくちゆう義邦を結果るに標吉ハ宿所にありて熟睡もとも
影護し是のこゝ心くるなりしにまろびてかくのごとし。あハ唯天の祐にそ
歡しゆと心ゆハ勇むを笑顔にまぎらうそハ一段のうりかし三日佛夏に
拘ひて生活を闕るに翌ハ殊さ半日の間もいと惜りぬべし。秋の夜
長ハ此ありに心のどうに相譚さくよりゆ天明く還るとも九身の保養に
ありなくべ吾倩ハ何ともいねとくしくといそぐせバ標吉ハ襟裏ありに松とり
あるせど火ハ点さず熟こる里の中あるべ是おくくもとそへどもけゆハ九月
廿八日いと暗くれバ更闌く還る為中と肩に掛さゝバ吾倩ハ早く来ん。
とく就寝ゆひ後にいひて母をうんうへりて義邦に目を注まれバ冠着もさゝぬ
面色に立てゞ遣しける標吉ハ一町あり歩く竊に引くゝ樹牆の

蔭軒端おぐ。掩れどもそこゝゝより立潛びて家内を張かゝるのもあり。然とても
かほ早かりと思へば有繋去り〇く背門より立又前門より立在外かゞ〻義邦を
守護ぶると一時許遠寺の鐘声幽かゆゑく既に初更を告渉きぬ。
今八冠者の出ぬのよ程へわ〻〻と思のよりん猶彼此を窺のよ怪しとやよ
るもかゝれば僅に心を思ふくしつ。尼沼のくこへ赴妃ゝり見より先に
黒萩八標吉を出し遣く心かゝるへかれども〇ゞ相譚しハ法師ゆく。
武藝あいと疎かり又その齢も五十よあるへ撃漏もとかとゞくし。
所詮冠者に酒を浮ひて醉臥さして寝首を掻せんこれにあ計略の
亦あるべしと較計つ佛夏よりく里人ゞ贈まし酒を煖かく着も些
塩梅しこれを義邦に勧めくいあゆう曩にハかのゞ僻ゆて殿の氣色を
蒙りゆゑ勧解まゝんと思ひかゞ〻標吉ゞ宿所にあれば影護てまうしも

出ぬ面皮のいと厚ゆ老女と思召れん恥しくそを待れ戦の男ゞ所為
として闘諍せし果に中直りとく盃をゆることの待かゝそれゆへあゝ程ど
過ゆし夜のすがらに帯かつぶへこの盃を挙させゆへ〻〻べ温八今宵限りか
又更に禁酒して身の慎を肝要に心ゆるかく仕まつ〻ん尚ら〻〻くゆし
油せども素より寛仁大度の君之許させゆへと泣声に只管賠話て止ざり
けり義邦これをうちまくこの老狐又ゝまを魅るにあゝん出ゞ〻ん標吉がひ
つゝゝ此彼思ひあいせれば〻まを毒殺せん為ゝさゝ〻八酔しそ同類に搦さ
せん為ゝべしこれも又此奴を謀りて脱き去んと心ゆへ思ひかゞ〻莞かと笑ま
こへ改りしゆをそけ月来あるよ身を寓かゞ〻酔ゝる人を拳しと若輩の
短慮あり後悔臍を噬と久しゝれとそかくハ勧解もせか何ぞ心ゝ含ゝ
とひて盃ゝ挙く飲めうかく席薦に湿入らせそゞゆに返しゆへ黒萩八

あるをあしらと含笑つゝ盃をうち戴けば義邦はいでや酌をとらんとて。
溢るまでよ節ぬゝ黒萩はこの十日あまり酒をば絶く喫ざりしよ今
その香を聞その味を味へば舌も蕩るだりよお酒えて餓鬼の如くよ飲
盡しつゝ又義邦よ勧めけゞ義邦はふくも酒を嗜まれども既よ毒酒を
試くければ只この老かよ醉せんとく輕く受つゝ投あへば黒萩は我を忘れて。
盃の數かさなり眼中濁りて舌もあやふく義邦もいとうう醉うる如く
膝を崩してそゞ酔ろよ肘杖突て黒萩よおん身は何とゆめ〳〵人曩衆
ゐれ慎てその実情をあらぬれば心おもゆ〳〵ねこぞをしておん身よ躓を
立せうゐれ衆いあぐ妻もあらば。おん身も亦孀婦之齡は相應しらば
とも世よ絶くあたるゆあらじ悔しなことをきてけり。といへれく黒萩胸
うち驚きそへ宣ゆ〳〵言ゆんとゆをきく〳〵えうてそおぢよおん弟を欺く

べ死。おん身が吾倩を欺くのゝかくもあで醉くは堪うこゝ罷くなとう睡
らんとのひうけて身を起をを黒萩瞻く推禁めいはんとまれば又さゝゐ。
塞玄よ約束あり初よりこの君のかう宣ぶいうでゐれ何を恨ゝよ人を
相譚ひ害せんとあぐく謀るべ死。うとそをゐは告らまゞ告ぢは今曾彼
人が潜び入く郎を殺さん。ひ切く密夏を白し共侶よ走らん狄いやく
密夏もこ告ゆうさば愛も想も殫果く吾倩を伴ひゆあぐ。うこてきさ
るをあてけりと悔の八千ゐび百千遍尋思よ暇あゝされば掌合して拜む
のゝ曾ゐゝちよいとぐあく醉も巡りて泣沈む義邦是をいえうゝぐ避て
臥房よ辷死うう且して黒萩は頭を擡ゐんかうゝく悲や郎ゐ捨られう。
一緒の陳腐と独酌よ復五六碗乱飲盃を投捨く隻膝立て沈吟し
再ゝゐび考ても偶靡く男郎花彼遍昭よ折せゐ今をゐゐの花もゆ〳〵

過失を賠話密議を告く今宵郎と共に走らん然へとも膝ふるを掛く。立あがれとも跟く蹌く蹌蹌めく義邦の枕方に近つく程に間々きこへ搔捜ると雖つ義邦立く傍に在り引つけく遣過し背を磯と衝しうへ。黒萩い擅と音して蒲團の上に倒るる。醉くるりの癖あれば一度倒れく遂に伯起ぶ睡るる如く死るる如く鼻息のみ高かりける。義邦いその醉を久しく有せん為に黒萩の頭より衣ふくうち被く。臥簟の下に隠くる脚半の紐を結ひあくぶ刀を取て腰に帯潛やうに戸を推開く竹縁に尻をかけ草鞋を穿燧袋を腰に著笠を忍かく。松明を携く黒白も別ぬ暗夜に標吉が誨る路い其処とちほつ多も。尼沼を投く出かくべ夜へ亥の時になりぬるに程に塞玄い寝室の鐘を途に突つ時分ぬと。標吉が軒端近く潛ありて内のやうを張る。

寂寞として人定り南面の竹縁あり雨戸を細く開くあり。この小房ハ義邦の臥簟なり。豫て吏り去歳まぎれに来る家の案内ハよく知るうあより入きとて黒萩が戸鎖を外しうあるん首尾好ことあるに点頭且縁頰に掛く伸上り又耳を側く内ゆい熟睡せを知けん身を横めて内に入り水を戒刀を引抜側めく搔捜く。雲時寝息を窺ひて是ありけりと見決めく左に被る衣を拊胸のあるうへ跳蒐く。藁藉も徹きとぶと刺を刺きく忽叫苦とぞりに魂滅る声を立さぜ。ゆに隨に刺苗く軈く首をぞ搔るうける。當下塞玄ゆあう鬻に黒萩が標吉をば甲夜の間に謀りて宿所に在せどいひにれども立かへりて厨のほとりに臥る欠這奴が覚くハおづるるんとありんべ更に黒萩に走るに及ぜして血刀を拭ひ納め首級の頭髻引提て烏夜に

紛れなく走去りかなし程よ標吉ハ尼沼川のあなたよ立て吉見冠者を
俟程よ半時あまりを過せども義邦いまだ至ぬ来ばゆく先こうぬ暗夜
なれば山路よ迷ひもせん狭り迫後れて悪僧の毒ふあひ恐ぬ斯と
なれば何時までも門辺よ立て俟べきうしよ養母が暁るとりやとちひ
過しのせられしおくよ冠者を苦しあまりいとく心もとなとうごちて
遠しく燧をとり急く携来つる松明よ火を移しおのが家路よ引へを。
途もなく油断せん冠者ハ後欲先欲と前後左右よ眼を配りて来るを
あるべきが家迄百歩よ足らぬ小阪道九折なる樹下を遠り出る行合よ塞玄
磯と逢ぬ標吉ハ早照せ松の光よ怪と見て面を包しが癖者が引提げ首ハ
養母と吐嗟とぞ驚怒るものれ癖者親の讐其処を退そと呼留れば塞玄も
亦火の光よ取る首をちらと錯誤をうと眸駭ぬ引提げ首を

うち捨て逃んとすれば標吉ハ驚然として松明投掛刀を晃と打振て
背を一刀丁と砍る砍られて落る頬被脱ぐとくもひ久塞玄も戒刀引
抜ぬ一声嘆て切つるを受ずして打撃し怯む処を蹴倒して起んとするを
一撃よ首打落しく息を吻ぬ又松明を早照らて仇人をうれば塞玄
なりこの悪僧ハ吉見殿を害せんと謀りしすうれハ正しく竊ぬるよいう
なりべきが母を殺しく走り去らんとあるん裏面のもうをもうんむやとく
聴て宿所よかへりて先義邦の臥房をうるよ養母の死骸ハてよ
あるこなて松明を接滅しく納戸の行燈引提て家の四隅隈なく捜るを
外ハ絶て死骸もなく爐辺よ盃盤狼藉しう原来冠者ハ悉なく
落ぬひしよ疑ひし自業自得といひながらも母ハ何の故よ臥房を
かへて冠者よ代り塞玄よ撃れぬひしやうん。なりの母ハ吉見殿を。

色中餓鬼
人間夜叉

惡僧塞玄

明處有王法
暗裡有鬼神

標吉

塞玄

醉臥せんとて酒を勧めみづから醉く彼君の臥房に迷ひ入るを塞玄が
あらぬ事して冠者ありと呼ひとりまづ母を害せし狀母の不幸は酒の咎
恩を悖り義を背き吉見殿を害せんと謀りし邪慳は因果覿面天の
責めあるべきなれどかつく故主を救めても親をば人に殺されぬ吾倅は何とある
べきさてもさてもしかり哀しやと養母の首をうち抱き潸然とし涙
歎く涙に間はあらりけを且しく心を鎮め吉見殿は恙なく落さるべきや
否をもうべ是もあるべき既に親を人に害され又仇を
撃られば如何迹を慕ひ當処の村長に誰をあらばぞ訴へべき
當郡の領主莊司殿は理非明断なく慈悲ふかと風聞に豫て聞
夜へいと長妃比丘に今より領主の館に赴らば曉ぐ中は必到らん
仇討のう免許をなく罪せずとなくは後に冠者の往方を索ん

吁ありとひとりごちく舊の岐路へ走り行後の證拠と塞玄が戒刀を
拿鞘を拾ひく首と共に携来つ母の頭顱にとり添く一祓に楚と負ひ
又松明に火を移して門戸を外より鎖固め星の光をうち仰けば夜は尚
亥中田舎道山田の畔に秋蛙鳴声高館の邊なる領主の館へと出去ぬ。

中輯第廿六

山神洞孔夜雨
信夫館の隱蓑

さて程に義邦は黑白も別ぬ烏夜なるまどろ迹認る人もなく影護さま
松をば燭さて山路ふくあるは其処に狀と踏分く行ども
標吉が教し川の上に出で峯に登り山を下りて処を彼此とうち
遶るうちにおのえく徒に時を移し身はいとくさく疲労しくば火を鑽く
松にうつしに照らして進む程に夜は丑三の比なるべし深ゆく秋の天定め

おく雨さへ俄頃より降そぐく心も共に松明の光もあくよ滅んとをかくるくハ
いよく進そぐくしと聯て樹蔭を索るよこの処巖ハ高く松痩て枯あんと
ゆる茅萱の下よりと絶くある虫の声を在斯をくての山間より廣やうある洞
ありて左右の岩よりとゆりくろ注連懸りくろ義邦こををえくりく頗まよ
この洞の中ゆハ山の神の禿倉あくんあゆく雨を避んとくく進こ入らんと
ゆるとこよ松明の火ハ滅果くろそのとこ裏面より声をうけく来つるを
誰そと問ふのあり義邦これは驚とくく原来この石室ハ山賊の巣
ありくろ運の窮と覚期してかりくようもも驚ぐぞ刀の鞘よるを掛く
両三歩進こ入りくれハ是行客こをうい何のぞと問ふへされくく文裏面より
これも亦行客こもぞ山路より迷入りてこの処ゆて日ハ暮くろ既より今宵を
閤夜ゆゆ麓より下りくこ此を揃りく天の明るを俟とゆふ義邦些かち

おくこれ二も猶欺詐ることゆやとて。一点も油断せぬいくくよんゆえくこれども
猛獣蛇蝎の患あくんよぞて火を燎ざるゆと詰問へば寒より然ありいくゆん。
今朝山河を渉せくこ此燧炭を遺せくば術りと答ふ義邦ゆてちくん
ゆハこれより燧も松もあり雨より撲れく滅くるのこいもくとゆひくく燧ぞとう
ゆく火を打ふを温やくこれば早ゆつくこ焼さくくる松明より
移くくこ是を左るよりあり照らしく右るこの刀の鞘を握りく洞の中ハ進こ
入りくゆその人のほとりゆ立くく迭より面を對ゆれが彼人ゆゆく声をうけ和君ハ
冠者よをハさぞゆと問ふくく義邦晴を定めくくこの行客ハ江三二
廣光ありこゆくいふとぞくりより歓びあくある主従ハ涙ぞ頻よゆくこ当下
三二廣光ハ遠くく居替りくく主君を上坐より居あくゆこ見ひくけあこ延て
見参より入りゆハ躬を先へまくくんゆ胃のこ踊くくかくくより辨くくこと

尼が如し併廣光ゞ月来の念願空しくして悉く尼尊顔を拜し奉る歡びハ言葉ハ述も竭しがたし。そも君ハ彼夜さう井平をねらく出ぬべせそ其ゆゑ思ひもよらぬ後盾ゆと長こしよりさう勇ひつゝ山中ハ迷せぬ心ゆとゝ。當国へハ昨けふ立入らせ給ひし歟又外ハ人隱宅を求めさせ給ひし歟廣光ゞ身ハ摘く推量りまつる難苦ものとのひけくさしらむ涙ハ目を閉ぢべ。義邦も鼻うちかむを現命ゆり時わりて圖ごろる再會の歡ひハるれも亦夢かとぞかりゆふかしこの春三月三日の夜故郷を逃去りしとゝ尼その曉ゆとハ上毛ゆる勝澤の松原ゆく間ゆく追兵ハ迫留らゝるれハ後陣を禦んとて井平と立別ゝ間遥ハなりしゝゆべ遂ハ渠ゞ存亡をゆゝ後れく来つるゆゝと思ハ直ハ加賀ハ赴尼朝夷ハあらんとて佐味ゞ宿所ハいまゝ尼く問ハ竺内ハ去歳の春より鎌倉ハ在りとゝふこの故ハ義秀ゞ往方も絶くゆゝハく。

進退其処ハ究りて且く小松ハ逗留ゆれど汝も亦来るゆゝ。朝夷ハ陸奥へ赴尼ゆゝあくゆゝ尼とゝ尼ゆゝをハゆゝく川尻湊ハ赴尼つて。商船ハ便りて四月のそゝあこの陸奥ゆる尾崎の浦ハ船をハせれ海陸の疲労大くゆゝ且く旅宿ハ枝を留く更ハ高館を歴覽し頻ハ進こて玉造ゆる判官殿の墓をそゝ。かへさハ駒形の山寺ゆく梓治部丞有友ゞ死黨馬場標太ゞ一子ゆる標吉郎とゝふものハ邂逅し渠ゞ家ハ身を寓せそゝふまでゝ世を潛びしハ又一朝ハ禍起りて其処ゆも足を駐ること始ゆくゝ。標吉ゞ教ゆる尼沼のくゝへとく聯く脱れ去るれどもいと暗くゝ山路ハ迷ひくさしてゆく川辺ハ到らゝ。伝ゝあくへゆるの雨ゞ主從ハ媒介して。処もあくんこの洞ゆく汝ハ逢しハ寔ハ寺こゝ氏神の冥助ゆる秋又先考の導尼ゆふ秋勝澤の危難ゆゝ雨ハあゆく温子を喪ひ今宵ハ

又雨はまつくらひろけなく三二は逢ひぬ。禍福は猶糾る纏の如しと
古人はいへり。吉凶倚伏は測るべからぬ。浅良井小三二は悉く死を汝はとど
當國は潜居ると知らく来つる浅井平内は逢ざりし浅原が生死はいかゝ
ざらやと過来しことを告あくぜ侶を忘れぬ誠心は廣光まもく感佩し
或は歓び或は憂ひて太息を吻き天飛鳥の鶏の啄大ことなくぜ
詛語へば風雲環會は難うり某痛はを負ぜしく速は小松は到らば。
彼処はくあひまくんは悔しきは只病著とその故は箇様くと八鳴室平
内を防ぎ留ると必死を朝夷は救れくは是より先は義秀は藁二郎は
相譚く浅良井小三二を越中婦員の岩神ある稲向判五許遣せり。
又義秀は去歳の秋稲向は宿かりく思人一三は再會し已ことを始ぜ
判五が女兒友鶴を娶りしは。又義秀は今茲の春下總へ赴ぎく更は

下野は来る夕赤貝の里を過りく浅良井は對面し冠者の危窮をまり
は又廣光は義秀と相伴ひその日大石の山越して上野は出信濃路まぐ
来つるに廣光が金瘡腫痛くは中途は日をかさねしは小松の旅宿はひつし
に追捕の沙汰最重ければ義秀は扶掖れてかくく旅宿を出されども。
進退窮りて忠ぎは自殺せんとしつるに義秀は禁やられ又彼一三藁二郎
ホガ冠者と朝夷を迎とくんとて行轎を早し来つるは環會衆人は諫られく。
心あくぜは岩神へ伴を義秀は冠者と井平を索んとく躯て其処より
立別を信濃近江をあらぐして赴くはをその夜さは一三は來ることを。
巨細は物がたりして。又いはく某は父子夫婦ひかけなく稲向が扶助は
よりて露命を繋ぎ横判五はとゞまるは良藥を求しば必死の金瘡
七月は至りく大くさあくぜ平愈せいぐ冠者のあん在所を索きくんと。

ゐひ決めくまづ方位を占せゝ全くこの陸奥よ當るゝとて稲向ホよ
辞し別れ商旅よ打扮て直よ進ゝて當國の封疆よ入りしハ八月のすゑ。
越後路より来よれべまづ河沼辺より耶麻會津大沼の四の郡を徧歴し。
安達の原よ安積の沼信夫郡伊達よ刈田柴田名取の片瀬川宮城野の
萩末枯くハ岩ゐの躑躅も春よ似ぜ奥へくと色深紅葉を幣よ是
首の神彼首の社へ願言ハゞ君よあハせ玉造賀美栗原の山里よ日数
ふりぬく露おゝれ露け紀途も長月のすゑハいろある吉日ゆく君恙なく
見参の本意を遂しハ五十四郡の主よあるゝ福ひありホ有ぐゝしと
歓びの天地よ満る意氣揚く忠信ホよ頭れゝ義邦熟うち受く。
原来朝夷約を違へぜこの春吾偖を訪ひるよ只ゝ危窮のとゝ紀ハ
ぬく對面をゆざりしゐ遺憾紀限りなれども既よ廣光一家を赦れその

男の蔭よ寓しハゝひろけゐ紀恩恵ゝ彼人ハ加賀よ鄰る越中婦負よ
ありとゝ孫ハ皆小松へと走りしハ今更よ是非なゐ紀ゐ弥さゐを亦ゐれ
故よ彼人ハ難を犯し危紀を忘ゐゐ果ゐ紀逆旅よあゝせんハ心苦し紀
ゐよあん又藁二郎も信あり義ありさゐのとゝもあゝぶり紀渠ハ寔ホ
向上ゝりさゝとゝ駒形村よありし日のゝゐをいへバ如此くゝ終ハ箇様
箇様ゝとく標吉ゐ忠孝黒萩ゐ嬉濫彼とゐく此と拾く一五一十を告ゐバ。
廣光頻よ驚嘆しかれバ標吉郎とゆゝんも亦ゐ紀の義士よをゝへ。
君ゐく所ゐしゝ祐あり御閑運ゐ紀よあゝん天も明バゐん供しゝくまづ
越中ゐで退くべし稲向判五ハ冨といへどもその志吝ゐゝ客を愛しゝく義
あり信ゐり朝夷逆旅よありとゐとも終ゐハ勇の家よかへゝん究竟のおん
隠宅岩神よあゝめゝと只管よ勧めしゝゐ義邦この議よ従ひて天の明るを

待程より雨いやうやく歇みぬ。かくて義邦ハ炬火を續くえさせて廣光と共ほこの洞の奥をゑるに入ると一反あまり四方ほど廣やうなりしを中程に石もて造れる禿倉あり。扉ハ失せて神体あり。こゝに住るあるじ。欲焼捨ん曲突あり。床もなき紀巨石あり山賊などの住所趾なり。又熊を撃猪夫などの寵猟せし所歟と主従さゝやき評して。舊の処よりかへりもれば。ほの間より天ハ明るく山鳥の声もあり。ほゝぶ紀と主従ハ草鞋の紐結びかえなどする程に忽地洞の外面より駿し紀人声あるく。柴に火を被投入れて焼殺せとぞ罵りける主従ぞくうち驚紀人やよ早まるな吾們ハ行客ぞ。昨夜の雨をあに避て天の明るを俟るぞ。殺さるべ紀ものにあらず。疎忽の挙動後悔あらんと諸声高く呼禁れば。大将とおぼしきの。洞門に立跨まる愚なり山賊ハ経任ず逆乱を甘んじて。

汝ハ近属この山の神の洞に穴居し昼ハ伏し夜ハ顕れ行客を剥里人を劫せり。民の訟置くこゝろよ。つくるとも紀汝ハ速やかに逃亡られば且く兵を向られぞ徒に日を送りて再び之を来るを揚り不意に業く推寄ぬ。かくてハ領主の御内まさるあるとあれども水草十郎昌甫なるぞ。とくく索を被れとぞ呼りける洞の中なる主従ハ。これを聞くあるく驚紀いかゞ所さもあらん。あれども吾們ハ山賊なれば。野伏にあらず疑しくハ当を俟く對面せんと叫ぶまに昌甫窮冷笑ひ。あらべ駿兵を退んとすれ。ほよと呼れば廣光ハ先に立義邦ハ後に跟紀洞より進ぬ処を左右に待る兵ハ足を拂く廣光と義邦を打倒し矢庭に索を被せるるものと紀廣光大紀に怒く蓬紀人これ挙動なる吾們ハ只両人ぞ何ぞ再三の問答に及ばず理不盡に捕ぬ。

その賊あると賊あらざるハ顔色言語よりても考べし。疎怒こと敦国ハ昌浦
呵々とうち笑ひ。さぞ不敵の癖者ハ形を変名を偽り出没さうあら
ざるよ賊あらぶるといへどそ。行客ありといへどそ。輙く放ち遣べきや汝ハ
何国より何処へ赴く行客ありぞ。姓名いかゝと問詰られく。廣光答ハ
迷惑し実を告んハ憚あり沈吟もれば昌浦ハ眼を瞪らし声を厲し立
此奴ハその出処をいつぞ。姓名を詐告らぬハ山賊よ疑ひなし。裏面あらハ
同類あらん搜せくと下知もれば早雄の騎兵十餘人戟を引提半弓よ
矢を刻ひ左右よ拉明振照らせく洞の中よ進入り戟をもて敲立奥
まで隈なく獵求れども二人ゲ外よ物もなかれば食徒よ退却ぞ。義邦も
ちでめり微運を覩じて頭を低垂よ再びものいハぞ。廣光られをうへ
主君の心中推量ぶべ胸ハ砕けく腸も断離るぞり歎せり。

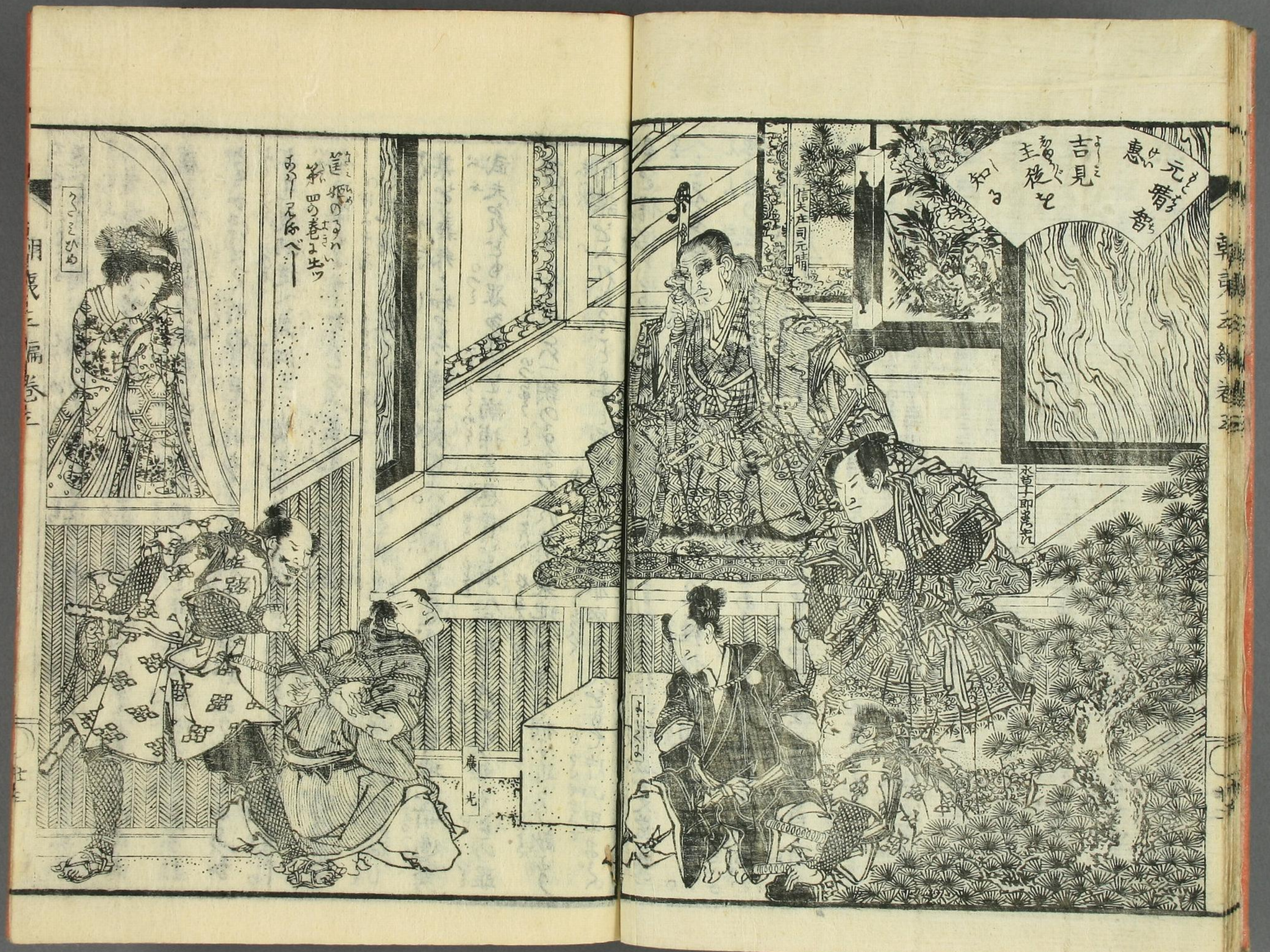
かくて水草昌浦ハ義邦廣光を引立さぞ。舞舎高妙とさゝやけく。
高館を望く還りろ。抑本郡磐井の領主ハ故鎮守府将軍藤原
秀衡ゲ一族ありし。佐藤荘司元晴ぞ。同國信夫郡よ在りしゝ。
信夫荘司と唱らり使是九郎判官義経の忠臣嗣信忠信ゲ父ありき。
かくて秀衡ゲ嫡子按察使泰衡をの庶兄國衡ホ父の遺訓よ恃つ。
九郎判官義経を害せんと謀りし比元晴ハ泰衡ゲ弟泉三郎忠衡と共よ
争ひ諫れども聴れぞ。泰衡竟よ忠衡を殺し義経を襲て衣河の
城よ自殺せ鎌倉殿よ媚られども頼朝られを不義とし。つゝ泰衡
國衡を征伐し合戦絶ず廿日ありく陸奥出羽二國平定ぬ。文治五年
秋九月ありし泰衡その性殘忍ありぞ。元晴ハ恩を思ひ義よ従ふく
らしよ叛うぞ石那坂の関と守て大軍を防戦ぞといへども大厦の

顛きんとせるとなり。よく一水の拄べきなかるべし。元晴弓折れ矢種尽て。その身は遂に生捕られる泰衡國衡滅亡の後頼朝卿もとより元晴を赦しくその本國へ還し遣し剣磐井半郡玉造半郡を宛行はる是その義烈を感じてなり元晴則高舘の城迹より程近き圓山に屋舗を構生残まろ家隷を招よせ討死せしめし子孫を扶持しとどまり善政を施し民に東作を勧めといえども近属大河太郎兼任ら一子修羅王郎經任厨川に起り平泉を略して鄰郡を攻動し乱妨狼藉大なるに依て良民農業を安くせず離散するもの多くなれども莊司元晴は防禦の軍配間断なく主後郡民力を勤しくよく境を守りしかば經任は間道平泉よりかぐら磐井玉造を犯しなぞ窺る隙を窺ひうかる程に信夫莊司元晴いにしへより玉造の山中に草賊隠れ住むとなく豫て計畧を旋らし家隷水草十郎昌甫を大将として兵三十人を指遣し山賊を搦捕せんとしつれども賊はくくられを知て逃失て再びかへらざる昌甫悞認て義邦廣光を搦捕り信夫の館へ帰陣しつ聴て件の主後を廣庭に引居まで書院のうしろ土圭轔るく未の刻音ひびく且しく佐藤信夫莊司元晴紋紗の大袖に綿の朽葉色の小袖を被て山梔子染の下襲金襴の袴を穿朱鞘の短刀を跨おび鞘多大刀を引提て屏風の背より遶り出端近う布儲る茵の上よりも登るべ水草十郎止くと敬て索取の影兵と共に頭首せり。當下吉見主後は頭を挙て元晴をみる年の齢は七十有餘なるべし頭は士峯の雪より白く肩は揚柳の絮に似る。星眼人を射て威あれども顔色温和にして猛くして長者の風あり。胡地の人とかえざりて在此莊司元晴は義邦廣光をつらくかえ

曲彔を前ゟ引直し汝ハ是經任ゟ支黨欲又亡命の小賊欲その名を何と呼ぶぞいつの比より玉造の洞の中ゟ隱住むや疾いへゞんと曲彔を搖遣信と疾視ゟ廣光驚ぐ氣色あく領主の案驗甚錯へり某等ハ山賊ゟ又經任が与類ゟあゝ加賀國小松より所要あつて来つる某が名ハ工三今一人ハ同郷の伴侶冠太郎と呼ぶ山路ゟ迷ひ山路ゟ暮て南を彼洞ゟ避ゟ洞をもて隱宅とするのゝ陳ぜんが頭を揮りいあくそれハ偽るゝん今汝が語音を聞くゟ北國のものゟ似ぜ。明く地ゟ実を告ゟ首狀せばやいつぞやと詰問ゟ一世の浮沈義邦吐嗟と跪坐ゟん疑ハそのゟあり吾が加賀ゟ来つるといへども生國を下總ゟ結城ハ故郷ゟひとしひ暗ゟ微笑現さもゟゝんその男子怜悧げゟ汝が摸様をゟ一人ハ武士一人ハ商人とんそゟ。

是を伴侶といひと相應ゟ。ゟれども言語應答山賊ゟ似ぜ又當國の人とゟ經任ゟ与黨ハゟ。ゟるを經任が同類とせゟ。

諍者の誣問ゟべゟれども亦その中ゟ情由ゟんゟゟやと試問べ義邦も廣光も忽ゟ胷ゟ驚ぜ。ゟうへを早知りて欲とゟぜ目と目を注ゟ又ゟゟ元晴ハその氣色をとんゟうゟ点頭ゟ扇をゟく水草昌甫を招ぜよゟ青ゟ渠が縛を釋放ゟ索取ゟを退せよとゟゟとゟぜ昌甫ハゟ洞ぜと思ひゟも肯を傳へゟその縛を釋ゟ義邦廣光ハ又ゟゟゟ悪夢の覚ゟ心地ゟ莊司が胸臆を揣ゟゟゟ心ハゟゟゟ元晴ハ懸共ゟ解捨ゟ索を紙ゟ皆退ぜ知ゟを又昌甫を招ぜ扇を口ゟ當ゟ密語べ昌甫ハゟを突耳をゟゟゟ遠りゟ果ゟ縁類を左へ遠りゟ


元晴
惠智
吉見
主後を
知る
信夫庄司元晴
水草子即まちん
笹姫のるすい
第四の巻より生ッ
あらーこれべー
くろこひめ
廣光

退出さう元晴かく相計らふ。立ちく義邦を招のがれく賓席にをせ。
又廣光を招よせくそいつのやう蕙蘭は裏といへどもその香外に洩れ荊妻
藏といへともその氣更に顕る某は眼翳こ耳疎紀稀古の翁にあるれ
どもおほせく所あり見る所ありく和君主従を知るり。包こめるを
吉見殿相従へるは江三三廣光にあらざるや。といはるく主従驚嘆し。
今は隠ちまをすとも廣光こそ君の咎いうあと陪めば義邦臆病氣色
あく現凄し紀眼力こ明察せられく慚愧に堪ぬ只詐し沢は信夫ぬし。
某を義邦と知るて縛を放せはと問せもあんば疑惑は有理元晴遠塞の
武夫なれども罪なき人を捕るく恩賞を求んや。あらんば又いうあるくその罪
なきをもとなべこ一朝のうまわざ某が来地は平泉の柵に近うり敵より
間諜を入れらくことあるとのが故にこれも亦密くに人をもて片山里あぐく

穿鑿せしに駒形の里人田丸標吉が宿所にて他國の弱冠寓居をれ。
その摸様は如此くと告るをきくにいはゆる比より骨相書をもて索らく吉見
冠者によく似うかほ巨細にあらん為に竊に標吉が本貫故郷を問ばれ
ばるるのありて告るやう原は鎌倉のあるく蒲殿の老臣ありし梓治部丞
有友が家頼馬衆標太と呼れしもの一子なく叔母夫田丸郡内に養れ
うといへり爰にいのくその弱冠は吉見殿あるこの分明なれども又倩案
るに彼人真に經任が一味与類あらんや逃るく當國へ来うかがら平泉の
柵あは入らぐ何ぞ標吉が家に寓ぬや加藤修羅五郎間諜者を入
とも不知案内の他國人吉邦をもてられに充んや彼此をもて案ずるに。
吉見殿は冤枉に身をあらるるのとそのとなるや推知せり。
この故にられは只あれども知らぬあるちーてかくは僉議に及ばぬ在此

近属玉造あり云云の洞中より山賊ありと宣へば腹心の老黨水草十郎
昌甫より兵卒ひさせ昨夜中より立て捕らせ且窺るに
両人共に相貌言語山賊に類せず折しも彼標吉へ養母黒萩を悪僧
塞玄に撃れ當坐に母の仇を殺して今朝しも訴来つるを退らぞ
あり〜と寓に標吉を閑室に召入れ吉見殿のすを問に渠再三
陳じれども證据分明なれば脱るに辞なく云云の故をむめく昨夕
冠者を山越に延〜くこたへと申す屈く実を吐しうべ延標吉に和殿
ホを透見させ冠者に相違なやと問へば是さへ脱るに所なくて落涙
数行に及び〜が相從へる一人に某いかぶ知らぬといへも骨相書をそ
案ずるに必廣光なん冠者を慕めくこの地に来るに昨夜たくぶ
山中めく再會せしに疑なしとぞ和君達の傳を釋放させぞ

肺肝を告るとは寃枉を憐めべし元晴元来秀衡が一族にて鎌倉殿の
譜第にあらぞ判官殿に恩義あり故に子共両人（同信 編信 忠信）を判官殿に
進らせしは紀文蒲殿に義経の舎兄なれども吾像なれば怨もなく恩も
なく義もあらぞ然ども彼昌甫が頻りに愛憐の心あり叔姪の骨肉に現有繋
捌来つ面をうそ〜より更に愛憐の心あり叔姪の骨肉に現有繋
ゆく冠者の面影判官殿に似るゆえ元晴子共を先喪て子孫の
為に謀るに由なしいざこの薄命の公子を舎蔵まゐらせんとぞ
あくかくの如し只ものまでもこが舘に潜びて時を俟べ勿を保めん
おぞの後盾ゆえなべしとその赤心を告るに義邦はいかもさるこ廣光に
雀躍しく天に歓び地に喜び席を避く拜謝しの迭代に月来の艱難
苦労を物がたり時夏が隠慝譏言又義秀并平標吉ホが義あり信

ある癖の趣おもむきなく告げ元晴感嘆浅からず為よ貌を改めけり。
且して元晴ハ掌を打鳴らせバ豫くあらかじめ水草十郎昌甫ハ
田丸標吉を招く縁類のほとりよ来つ標吉ハ義邦の恙なきを見て大紀よ
歓び思ハぬ小膝を進めて元晴これをえうへうて標吉郎汝當坐ハ
養母の讐塞玄を殺しすこの賓客の口状と符合せりやとその答ひし。
ぬくよ汝ハこの賓客よ舊縁あるものなれば召く對面を許さとその旨をうろ
ぬよと諭せをぬく義邦ハ坐を立く廣光もろ共標吉が添とりよ来つ疇昔
ハ物ハ後のち信夫荘司が蔭よ寓る縁由を密語バ標吉も亦黒萩が枉
死のすを告よろう。義邦ぬく嘆息しその仇討の速紀を誓く廣光よ
引おハぬるバ廣光ハ標吉が月来主君を介抱の歓びを述るよるん標吉も
亦廣光が主君を慕ふ忠心の空しくぐるを稱く己ぞ彼此會語やう

やくよ果しく義邦ハ舊の坐よかへりく主人よ挨拶を元晴ハ莞爾ふ。
昌甫を召近つけ汝が魂忽ハあろくよこのくよ徳あるとえバあるドの
翁が代りく當坐の牽出物せんとく刀を取て与へしくバ昌甫感く且
歓びこハ全く愚の功名ゆをゆへとうち戴く腰よ帯れバ義邦廣光
共倍よ吾們が搦捕られし禍ハ現塞翁が馬しろうとうち笑く昌甫を
労へバ昌甫も改めく無二の志を示しまろ次のヨ既よ傾けバ元晴ハ又
昌甫よりち對ひ標吉ハ夥兵ホよ送らせく駒形村へ犯し遣し彼
塞玄が亡骸ハ形の如くよ計へべし標吉が忠孝いへべさしく汝ハ腹心
あるべかくハ機密をあらせもれこの賓客の一件ハ努漏もべうしと
叮嚀よ説示せバ昌甫ハ謹く肯を標吉よ傳まバ標吉ハ恩を謝し
義邦廣光よ別を告昌甫が後よ跟ぬく聽く退紀ぬバ元晴ハ

席を改めく義邦主従よ酒食を勧め是より常ゑ別室ゑ扶持せ深く潜せ近く使る、男女ゑもその心を始さるゑ食腹心のあれあるとゝ絶く他へ漏せとゝ。かくゝく又元晴ハ標吉が忠孝の大ことゝ〻を感賞し渠が養母の忌ごゝゑ果をバめ〻宝〻て村長ゑせん。他村の民をゝゝ移〻〻く渠が下ゑをゝ〻せんとそ愛をるあゝろ深かりけゝ。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之三終

早稲田大学図書館
011888007280